

## 生活をみつめ、人とかかわり、ものとかかわる

### 増渕 哲子

#### 一 はじめに

「人からコンクリートへ 生活保護切り下げ、公共事業は増加」の文字がこの一月の新聞第一面に踊った。二〇一三年度の政府予算案では、生活保護の給付水準が引き下げられる。しかし、現在でも生活保護の利用率は一・六％に過ぎず、捕捉率は二割程度と言われる。救われるはずの人々に必要な手が差しのべられていないのは明かである。

分科会の冒頭におこなわれた共同研究者の伊槻久美子氏による基調提案では、人々の生存権が脅かされている日本の現状分析とともに、家庭科の学習内容は、基本的人権の保障を、生活の隅々に具体的な形で体现するものであること、家庭科への今

日の役割期待が論じられた。

新任教員の退職傾向が続いているとも言われ、教育を取り巻く状況は日々困難が増す一方であるが、分科会には昨年度に引き続きの若者が多数参加してくれた。老若男女、多様な人々の参加を得て、実践報告に移った。

#### 二 実践報告

##### 1 「家族とのつながりを大切に

〈家庭科の実践を通して〉

北見西小学校 大坪 哲也

○体育の時間が終わると体育館や校庭にジャージがとり残されている。誰も取りに来ない。学校には季節に関係なく週に四、五枚の上着や靴下が、持ち主不明のままたまつていく。朝家を出た時の服装と帰宅時の服装が違はずだが……。

○どこにでもごみを捨て、ごみの中でも平気で座っている。教室のごみ箱は一日でいっぱいになる。

○芸能人並みの忙しさ。放課後に遊ぶ時間はない。親の帰宅も遅く夕食も当然遅くなる。夕食の後にようやく自由な時間がやってくる。夜更かしは当たり前、朝は起きられず何も食べないまま学校へ、という毎日が繰り返される。

大坪実践では、四月から担当した五、六年生家庭科四学級の子どもの日常が描写された。

とにかく掃除が嫌いな子どもたちには、掃除を楽しくする仕掛けを考える。「ゴミ取りビンゴ」、「これワザ」、「ちよこちよこそうじジョーズ」、「校内クリーン大作戦」などの命名が楽しい。教室、調理室、ワークスペース、階段、トイレなど、掃除の担当区域毎にどのようなごみが多いか予想し、実際に調べる。セロハンテープでごみを採取してノートに貼り、さらに虫眼鏡で観察しスケッチする。ごみ箱の中にはどんなごみが多いか調べる。ちよっとした片付けや分別、ごみ拾いしたことを記録しておく。家族の掃除の達人からワザを取材し、校内クリーン大作戦で活用する。「目に見えないゴミが多い」、「よく見ると、私たちが使った後のものが多かった」など、ごみの調査は予想以上の驚きがあったようだ。

小物づくりや、朝食づくりなどの実践でも、必ず意識しているのは子どもと家族をつなげることである。作品に添える家族へのメッセージを書き、家族からメッセージをもらう。親自身が生活に追われ、家事を子どもと分担したり教えたりすることができなくなっている。家庭科で子どもと家族をつなげたい。子どもが安心して学校に通えるような家庭になって欲しい、という願いを込めた実践である。

ある小学生は湯を沸かしたやかんの持ち方が分からず、両手

で熱した胴体を持つとうとする。上靴のひもを結ばないで履き、足を引つけて転ぶ。またある高校生は家ではいっさい食事をしない。教室の床にごみを捨て、ごみの中で生活しているかのようである。子どもたちができないこと、しないことは、しばしば指摘されることであり、それらは消費生活の変容がもたらした結果ではあるが、やはり驚くことは多い。参加者の関心も高い。こんなことまでできなくなってきたのか、との思いは年々強くなる一方である。子ども自身が引き受けて何かをする機会も、家庭ではあまりに少ない。

討議では、生活文化の視点からの発言があった。グリーンランドにプラスチックが入ってきた時、処理できなかったという話がある、清掃もまさに文化であるのだ。「しつけ」という視点ではなく、



清掃の文化、すなわち生活文化の継承・創造の視点から学習の意味を確認したいとの指摘があった。

## 2 「地域に香るもの」

せたな町立大成中学校 日下 恵子

今年度赴任した大成中学校の全生徒数は四〇名、地域の伝統芸能「久遠神楽」の伝承はこの生徒らが担っている。新入生は上級生から演舞を教わり、年に数回の上演を重ねて演技者として巣立っていく。この過程に教師はいつさえ関わらないという。新入生の第一回目の練習には、地域の保存会の人々が参加し、演舞の由来などを語ってくれる。

学校は校舎の窓から日本海が一望できる漁業地域にある。しかし漁業に従事している家庭の子どもはいない。小学校でイカ釣り体験があり、中学校の「総合」でサケやホッケの燻製づくりを行っているが、漁業が子どもに日常に溶け込んでいるわけではない。

これまで長く勤務していた農業地域では、生徒の家族や親戚に生産者がいた。生徒は畑や田んぼがある中で、ごく身近に生産者の姿を感じながら暮らしていた。家庭科では地元の魅力的な農産物をどのように生かしていくかに力を注いできたが、生徒が食材を大切に扱うことができたり、「生産者を支える消費者に育って欲しい」とのメッセージが受け入れられたのは、地

域の育てる力があってこそだったのでないか。

さて、新たな赴任地では給食残量の多さに驚くことになる。食缶の半分に当たる副菜の野菜がどっさりと余る。栄養学習のある程度は終えている学年である。これは農業地域と漁業地域の違いなのだろうかと考える。環境の中で育てられるものがあるのならば、この大成地区特有の、地域と学校の距離の近さ、さらに子ども同士の学び合いを生かした授業をおこなっていくと決意する。

五月、役場に勤める保護者から「バカガイ」を使った調理はどうかと声がかかる。「あおやぎ」とも呼ばれるが、ほとんどが関東地方に出荷され、地元の人には入らない貝である。大量に提供された貝を蒸しあげ、ソースにからめてクリームパスタを作る。蒸しあげた際に出る貝エキスの味に、生徒からは驚きの声があがる。

調理の前には、役場から「檜山の漁業」の話をしてもらう。「漁業についてはあまり興味がなかったけれど、漁業のことが少しわかったし、楽しかったです。バカガイは、はじめて食べました。」「自分の住んでいる地域のを、自分達で調理して食べられてよかったです。」漁業が盛んなことを初めて知った、バカガイを初めて食べた、との声が多数あがった。

その後取り上げる実習素材についても役場職員と打合せ決定していく。また農業に比べ、漁業の現状は情報が少なくわかり

にくい。教師の中で話題になることもない。教師自身の学びが必要と、家庭科サークルで漁業施設見学と水産業の現状についての学習会をおこなう。

討議の中で知床出身の参加者は、小学生の時に、友だちの父親の漁師が提供した鮭を調理したり、トバづくりをした経験を語った。また、農業と漁業の両者が盛んな地域で育った参加者は、小・中の九年間を通して栽培や養殖を経験してきたという。地域の人々と共にある学校のあり方や実践に、参加者の注目が集まった。

残食についてさらに論及された。給食の残食実態は変容していて、以前は嫌いな物だけを取り除いて食べていたものだが、今は嫌いなものが入っていると料理そのものを食べないという。給食に納豆が出ると窓を開けたり逃げたりする生徒もいる。「納豆に気の毒だべや」との声も上がる。生産者の姿を感じているか、「汗流して作っているよね」と思えるか、が食べ物への向き合い方を変えるのではないか、食の授業を通して変えていきたいと日下氏は述べている。

### 3 「家庭科を担当して」

せたな町立瀬棚中学校 才門 砂江子

免許外で家庭科を担当していたが、家庭科こそ生徒にとって本当に必要な教科ではないかと考え、何をどのように教えたら

よいかと模索する中で、通信で家庭科免許を取得することを選ぶ。レポートの冒頭では、免許取得にいたる思いや取得までの道りが語られた。

家庭科の授業で大切なのは、実践につながる実習であること、実習の中で知識を身につけていくことだと考えている。とはいえず実習授業の時は制限される。まずは「やってみよう、やってみよう」との思いを喚起できる授業を目指している。いずれやってみようと思っていたのが、魚をさばく実習であった。当初はいわしの手開きを予定していたが、いわしが入荷せず急遽さんまを開くことにする。さんまの三枚おろしは、生徒全員が初めての経験である。まな板のかわりに新聞紙を使う。賑やかに騒ぎながらも全員が三枚おろしをやり終える。おろした身は、蒲焼きにする。もう一品としてほうれん草のごま和えを添える。ゆでるときの沸騰の状態がわからない生徒が多数いる。また、片栗粉と砂糖の見分けがつかない生徒もいる。

「蒲焼きはすごくうまかった。」との声が多数聞かれた。この言葉も嬉しいが、才門氏にとっては「思ったよりも簡単だった。」は何にもまさる言葉であるという。もしかしたら家でもやってみようという気持ちになってくれるかもしれない、と期待が高まるのだ。

生魚を使った調理実習に対する参加者の関心は高い。常呂町出身の参加者は、自身が中学校で魚をさばいた経験を語った。

生魚を使う場合の衛生管理の方法についてもやりとりがあった。

なおレポートの終わりには、資料編として生徒の料理経験の調査結果も掲載されている。料理を「ほとんどやらない」生徒は、二、三年生合計四二人中の一三人である。「作り方がわからない」「失敗したらいやだ」などの理由である。「ときどきする」は二人。「よくする」は八人である。

#### 4 「定時制高校における実践から」

##### 北海道札幌工業高等学校定時制 石川 行孝

札幌工業高等学校定時制には、機械科、電気科、建築科の三学科がある。時間割は四五分授業が四時限で、三年間で卒業する「三修制」も実施している。単位を取りに来る五〇歳代の生徒もいて、年齢構成はバラエティに富むが、女子生徒の在籍数はわずかである。

家庭科については、家庭基礎を三年生で二単位、四年生で一単位履修することになる。三修制の場合は、三年次に通常時間割の前に「〇校時」を置いている。

定時制三、四年生の生徒の特徴は、なんらかの仕事を持っているという前提があること、さらにあと数年で選挙権を手に入れることへの実感があることである。給与明細や、税金などの政局と関わる問題、さらに将来像をどう考えるかなどの授業に

手応えを感じるといふ話もあった。

シラバス、授業進行記録、授業プリント、調理実習のレシピプリント等をもとに授業内容が紹介された。例えば食品・調理の学習の前に消費経済を置き、そこで百分率を理解させておく。調理実習ではレシピ解説はせず、予備実習を前時に位置づけ、そこで教師がすべてを作り生徒に試食させる。定時制の給食は野菜を生徒が食べないので、野菜がほとんどつかなくなったという。これには参加者が驚いた。肉と米があればいい、あるいは牛乳とパンだけで食事を終える生徒もいるが、実習メニューの「肉を入れず、野菜の旨味だけで仕上げる“夏野菜の簡単スープ”」、「飯に梅肉の風味をつけ、複数の薬味で豚の脂を和らげる“梅豚丼”」、「和風出汁を使い、ラードを使わずに仕上げる“肉味噌拉麺”」は、自分でできる破綻回避の調理、といった意味を込めている。

定時制の条件整備の問題に参加者の関心が寄せられた。予算はほとんどないに等しく、備品は全日制で購入している。調理器具の使用は、全日制と定時制では分けている。一七時四〇分から一校時が開始される時間割だが、全日制と打合せをする時間的余裕はない。実習の時は後始末に追われる。定時制で学ぶことを誇りにして部活動にも熱心に参加する生徒もいる。三、四年生は「生き残ってきた」生徒ともいえるが、親との確執や経済的困難をかかえ、寄る辺のない生徒もいるという現実があ

る。

## 5 「学校設定科目『生活教養』で自分を耕す」

北海道札幌白陵高等学校 伊槻 久美子

二年前に単位制に移行した白陵高等学校では、各二単位の新科目を設定し、進路選択に関連づけるカリキュラムになった。

「生活教養」はそのような新科目のうちの二科目である。科目の準備にあたっては「①サービスマス接遇検定三級受検可能な知識を身につける、②生活全般に関する一般教養を身につける」を目標として、検定問題を学習内容に取り入れつつカリキュラムを構成していった。検定は毎年初夏におこなわれるが、今年度は二七名のうち六名が受検、受検した生徒の満足度は高いものであった。

検定関連内容以外は、浴衣の着付け講座、電話のマナー、葉書の書き方、手紙の書き方、茶道と礼儀作法などが取り上げられている。着付け講座はお楽しみとして設けたものだが、外部に協力してもらい、会場の設営と後片付けなどを生徒が担当した。見学者も多数訪れた。お礼状を書くことも学習である。

「わかってる」と言っていた電話での対応の仕方だが、何度も繰り返し、次第に練習にのめり込んでいく。手紙の宛先を誰にするか、何を書くかは一時間では決まらない。きょうだいに「迷惑かけてごめんね。これからもよろしく。」と書いた生徒、

介護見習い先や、インターンシップ先の病院を選んだ生徒もいる。茶道のDVDを見て、いろいろな作法があること、作法にはどのような意味があるのかを知る。見たことのない道具の名前を知る。実際に帛紗のさばき方を練習する。一〇分間正座を目標指してみる。

体力があっても生徒の体はぐにやりとしている。立ち方、座り方には合理的な方法がある。ただ歩くことも同様である。生徒は嬉しそうに何度も練習している。お互いに学び合い、みるみる姿勢が変わっていく。

単位制移行後の変化についての質問があった。これについては「あきらめない指導」という教員の対応が大きいとの話があった。伊槻氏は従前より、朝の玄関での出迎えやバス清掃、校内巡回などをおこなってきたが、これが広がっていったことや、担任が教科の授業を参観したり、授業公開の期間が設けられるなど、学校をオープンにする取り組みが進んできたことが紹介された。

## 6 「保育実習前の授業を考える」

北海道滝川西高等学校 福岡 あゆみ

保育分野の授業では、一〇年ほど前から、全クラスで保育実習をおこなってきた。クラスを二グループに分け、一方は保健センターに行き、妊婦検診（四ヶ月又は一〇ヶ月）に来た親子

とふれあい、男子が妊婦体験をする。また保健師さんから妊娠・出産について、栄養士さんから離乳食について話を伺う。もう一方は保育所に行き、幼児に自己紹介をしたり出し物を披露して交流するのである。

こうしたふれあい体験の事前・事後の授業は、ほとんどおこなってこなかったが、「ブレインライティング」という発想法をつかって、グループワークや一人ひとりが考える場面を多く取り入れた授業を計画した。

この方法は次のようなものである。五、六人が班になり、例えば次の質問「保育実習に行ったところ、お母さんとまだ歩くことのできない一〇ヶ月くらいの赤ちゃんがいました。あなたなら、どんな声をかけますか？」について、配布されたシートに考えを書く。シートには班の人数分の記入欄がある。一人が書いたら隣の人にシートを渡す。隣の人はすでに書いてあるアイデアとは違う案を書く、そしてさらに隣の人にシートを渡す……これを繰り返し、班で最後に一番良い案をまとめ発表する、というものである。

実際にやってみると、「一〇ヶ月の子どもって歩けないの？ 話せないの？」との質問が出る。保育実習ではお母さんと赤ちゃんを前にして固まってしまう生徒も多くいるが、今回はこの発想法でヒントを得た生徒もいた。

子育てにはサポートが必要であることに気付いてもらいたい

というねらいがあるが、この点については、「共働きが増えているので、保育所などは必要不可欠……イメージでは遊んでばかりだけど、本当は大切なことを学んでいる」、「保健センターのような施設は子どもだけでなく、お母さんの悩みを相談できるので、母子のどちらにも大切」、「男の人は、あまり子育てに協力しないイメージ……保育実習にいった後は、男の人も一緒に四・五ヶ月検診に来ていたりして、少し変わったイメージを持って良い方向にイメージを変えることができ」た、という感想を生徒は書いている。

討議では、発想法を使ったことのメリット、あるいはそれをどのように方向付けていくかとして、「引き出し」のヒントが得られるということ、引き出しの数はあえて限定せず（方向付けず）とも良いのではないかというやりとりがおこなわれた。中学校でも保育実習が必修化となるが、まずは子どもの気持ちにひたり、学びに向き合わせたいとの声があった。

### 三 次年度に向けて

一月の新聞に、日教組教研集会の高校家庭科レポート記事が掲載されていた。高校生は日本茶の入れ方を知らない、というものである。天声人語も取り上げたことには驚いた。小学校教

科書にはガスコンロを使いやかんで湯を沸かしお茶を飲む、という教材が掲載されているが、家庭ではやかんでなく電気ポット、ガスコンロでなくIHクッキングヒーターが使われ、日本茶の茶葉が無いことは珍しくない。高校生が知らないのもあながち不思議はない。

本分科会でも、できなくなったことや生活上の常識がわからないことが、いくつかのレポートで報告されている。手やからだを使わずとも事足りる生活に大きく変容し、子どもの圧倒的な生活経験の不足は、当然ながら生活現象に対する洞察力の低下を引き起こしてしまう。

しかしその一方で、今年度の分科会レポートでは、子どもが「実体あるもの」に自らからだを使って働きかけ、何らかの確信を得ることを望んでいる様子が、強くあらわれていた。

生活にかかわる技術力の低下は今後も続くと思われる。数年来、本分科会では生活文化の継承と創造の視点から、この問題に取り組んできた。なお今後の課題として、検討していくことになる。

本分科会に昨年度も参加した学生二名が、栄養教諭として採用試験に合格したとの嬉しい報告をしてくれた。この分科会が、近い将来、家庭科と栄養教諭の創造的実践誕生の場となるかもしれない。

(北海道教育大学札幌校)